第四十回 わたしからの人権メッセージ

2019年度特選作品集

堺市人権教育推進協議会

第四十回
わたしからの人権メッセージ
特選作品集

「わたしからの人権メッセージ」発刊にあたって

堺市人権教育推進協議会では、人権を守り、平和で差別のない明るいまちづくりをめざして、市民主体の活動を進めています。その活動の一つが、本年度で第四十回を迎える「わたしからの人権メッセージ」です。多くの市民の皆様が日常生活の中の人権問題に関心を持ち、自ら考え綴ることによって人権についての認識と理解を深め、さらに作品の共有を通して広く人権啓発につなげることを目的として実施しております。

今年度も、私たちの呼びかけに幅広い年齢層の皆様から、数多くのメッセージを寄せていただきました。作品を応募していただきました皆様に心からお礼を申し上げます。厳正なる審査の結果、優秀な作品二十点を特選作品とし、ここに、「わたしからの人権メッセージ」特選作品集として本冊子を発刊します。

すべての人の人権が尊重され、自分らしく安心して暮らすことのできる平和で差別のない社会を実現することは私たちにとって共通の願いです。しかしながら、現在においても、インターネットによるいじめや部落差別、女性などに対する差別や偏見、また虐待など心を痛める事象が起こっています。さらに、世界では、多くの人々の尊い命が、戦争や民族紛争等により失われています。

堺市では、「堺市平和と人権を尊重するまちづくり条例」を施行し、本年四月からは「堺市パートナーシップ宣誓制度」を開始するなど、すべての人の人権が尊重され、安心して自分らしく暮らすことのできる平和と人権尊重のまちづくりを推進するとともに、「誰一人取り残さない」持続可能な未来への世界共通目標であるＳＤＧｓ（エスディージーズ）の達成に向けて取り組んでいます。

本冊子は人権が尊重され、平和で差別のない社会を創り出そうという応募された皆様の真っ直ぐな熱い想いと、真摯な姿勢が込められ心を打たれるものがあります。

私たちは、さまざまな人権問題を自分自身の課題として受けとめ、日々の生活の中で積極的な行動へと発展させていくことが大切です。

本冊子が一人でも多くの方々に愛読され、私たちの身近にある人権問題を考えるひとつのきっかけとなり、私たちのまち堺から人権文化の花を咲かせる一助になることを期待しています。

二〇一九年十二月

堺市人権教育推進協議会

会長　金　丸　尚　弘

もくじ

□女の子でもできるもん　1
□ふつううってなんだろう　3
□親子のかたち　5
□令和の時代になって　7
□子どもたちの気持ち　大人につたえる　9
□弟の手帳　11
□プラゴミの環境の中で自分にできること　15
□これが私の人権メッセージ　17
□障害者と人権　19
□僕にできる手助けとは　23
□見えない障害　27
□自分の目で確かめるということ　29
□思いやりのある世界へ　31
□偏見　35
□居場所　37
□遊園地で思いっきり楽しみたい　41
□泣き笑い人生　―私の夫と識字―　43
□緑色の消防車　47
□「いろとりどりの世界」を見て　49
□今が青春　51

※御本人の希望により、お名前等が掲載されていない場合があります。

女の子でもできるもん

小学校一年

わたしはサッカーが大すきです。
いえであさからばんまでれんしゅうをやっています。
いつもかべにボールをけってれんしゅうをしていたので、しょうがっこうにはいってからおともだちとサッカーができるのをとてもたのしみにしていました。
あるひ、おひるやすみにおとこのこがサッカーをしていたのでわたしもいっしょにやりたいとおもって、
「いっしょにやろう。」
といいました。
すると、おとこのこに
「おんなやしサッカーできないからむり。」
といわれて、とてもくやしくて、
「できるもん。」
といいかえしたけど、きいてくれませんでした。

もう、それいじょういいかえすことばもみつかりませんでした。
とてもくやしくてかなしくて、あたまの中で、サッカーっておんなのこはいっしょにできないのかなとおもいました。
でも、テレビでみたりするとサッカーは女の子でもできるスポーツなのになとおもいました。
女の子だからといってなかまはずれにされたくないです。
いつか、いっしょにたのしくサッカーができるようになりたいです。

ふつうってなんだろう

小学校二年　荘司順史

このまえ、コンビニに行きました。すると、ぜんしんひどいやけどのあとがある人がいました。すこしこわいので、じろじろ見てしまいました。そのあと、おかあさんに「ワンダー」というおはなしをすすめられました。

「ワンダー」とは、かおがびょうきでへんけいしているオギーという男の子のおはなしです。オギーは、ゾンビみたいだとか、びょうきがうつるなどいろいろいじめられます。それはなぜかと言うと、みんなが、がいけんしか見ていなかったからです。だけど、みんながオギーのなかみを知るとともだちになります。おはなしの中で、校長先生が「オギーは見ためはかわらない。われわれが見るめをかえるんだ。」と言います。

見ためがぼくとちがう人は、ふつうじゃないっておもっていたけど、ふつうってなんだろう？

そんなことを言うより、なかみを見てともだちになったら、みんなしあわせに生きられるとおもいます。

親子のかたち

小学校三年　三好晴輝

ぼくのお母さんは小さいころネグレクトをうけていた。
ネグレクトとは「いくじほうき」というぎゃくたいのことだ。
お母さんは、生まれてすぐにぼくのひいおばあちゃんの家にあずけられて、小学校に入ってからぼくのお母さんのお母さんとくらしはじめた。
でも、学校にはあまり行かなかった。
だれも帰ってこない家でせんたくやごはんを作ったり、かぜをひいても自分でふとんをひいてねていたんだって。
そして大きくなったお母さんは家を出て、たくさん仕事をしてぼくのお父さんと出会った。
けっこんして子どもをうんだお母さんは、たくさんぼくと遊んでくれた。
毎日おいしいごはんを作ってくれるし、家はいつもきれいだ。
お兄ちゃんとぼくと妹をとてもあいしてくれている。
でもお母さんはすごくさみしがりやで、買い物も一人で行かない。

いつもいっしょに行こうと言う。
だからめんどうくさいなぁと思う時もあるけどいっしょに行ってあげる。
だからぼくもさみしがりやなのかもしれない。
あたり前のようにすべての人がりょう親とくらしてるわけではない。
お父さんだけだったり、お母さんだけだったり、りょう方いない子もいたりする。
だからぼくは、ぎゃくたいのニュースを見るととてもかわいそうで、こわくなったりする。
ぎゃくたいでしんでしまったり親とはなれてくらしてる子がいる、とテレビで見るととても心がいたくなる。
ぼくが大人になって、子どもがうまれたらすごくうれしいと思う。
でも今のぼくのようにしあわせな生活をさせてあげられるだろうか。
今もさみしい思いや、つらい思いをしている子がたくさんいる。
でもぼくのお母さんのように自分の力でしあわせになれる！ということをわすれずに、人生を大切に生きていけたらいいなと思います。

令和の時代になって

小学校四年　奥村真惟

男子のわんぱく相もう全国大会は三十五回をむかえました。わんぱく相もう全国大会には、市町村の大会を勝ち上がり、その後都道府県で勝ち上がった四・五・六年生の男子のみが出場できます。でも女子はゆう勝しても行けませんでした。

私は、一年生のときに堺のわんぱく相もうの大会に出場したことをきっかけに、相もうを始めました。それまで、男女の差には、気がつきませんでした。男の子との体格差に始まり、大相もうの伝とうから、女子は土俵に上がってはいけないので、堺の大相もうじゅんぎょうのときのちびっこ相もうでも、土俵に上がれず、悲しい思いもしました。体格差はしかたがないことなので、私は小学校でも、両手足に重りをつけて生活をして少しでも筋力をつけようとしています。相もうの練習もがんばっています。

大相もうの長い伝とうは守るべきものだとも思うので、国技館の土俵に立てないのは、しかたないかもしれません。でも、令和の新しい年になり今年からわんぱく相もう女子全国大会がひらかれることになりました。

私は、ぜったいに出場したいと思いました。結果、堺大会でゆう勝し、大阪決勝大会でもゆう勝し、全国大会に出場できました。うれしかったですが、結果は二回戦で敗たいしてしまいました。四・五・六年生の、ゆう勝者とじゅんゆう勝者の六人で出場しましたが、お姉さんたちはレスリングやじゅう道や相もうなどがんばっている人たちで、強くやさしくいっしょにいて学ぶことが多く、自分もそうなりたいと思いました。結果は、なっとくできないものでしたが、次の目標ができました。

毎年、男子の大会は国技館でしています。今年は工事のため、男女とも別の場所でしましたが来年男子は国技館で女子は名古屋だそうです。

女子のわんぱく相もう全国大会が新しい時代になりひらかれてうれしいですが、国技館の土俵に上がれないことがわかりました。

堺は学生相もうの発しょう地だと聞きました。だからこの堺が、女子相もうの新しい国技館のような、相もうのせい地になっていったらいいなと思っています。

これからも新しい時代を作っていきたいです。

子どもたちの気持ち　大人につたえる

小学校四年　中野蓮雫

てい学年のときに、同じクラスでなかよしだった男の子の名前がいきなりかわりました。そのときは、よくわからなくて、とにかくびっくりしました。そしたら、次の日、とつぜんその子が引っこしすることになって、とてもショックでかなしくてたまりませんでした。

いつもと同じ様子で「引っこすねん。」と、わらっていたけれど、そのでき事はうれしいことではなかったのだと後になって知りました。他の友だちも引っこしてしまってから、理由を知ることがありました。

その理由は、お父さん、お母さんが「りこん」したから、ということです。もう、お父さんとお母さんが家族でなくなるということだと、ママが言っていました。

「じゃあ、子どもたちは、どうなるん？」とママに聞いたら、「どちらかの親についていくんじゃないかしら。」と言っていました。お母さんについていくと名前が変わることが多いみたいです。

もし、わたしだったら、パパとママが家族ではなくなるのは、かなしいし、ぜったいに止めたいし、泣いてしまいます。それに、どちらかについていくと言っても、どちらかを選ぶこともできないし、どちらかにつれていかれてもかなしいです。

やっぱり、パパ、ママ、わたし、家族みんなでいっしょにいたいです。友だちもそんな気持ちだったんじゃないかと思い、かなしくなります。

「子どもたちだけで止めること、できんのかなあ。」とママに言ったら、「親がきめることやからむずかしいかもね。」と言っていました。

「子どもがきめられないのはおかしい。」と思いました。自分の家族なのに、勝手に親がきめて、大好きな学校、友だち、先生ともさよならになる。名前がかわって引っこししなくてもパパとママがいっしょにいないのは、子どもたちはかなしいのに、どうして大人は勝手にきめてしまえるのかなと思います。

「最初から、ママだけで育てる家もあるから。」とママは言っていたけれど、最初からパパとママのどちらかがいなくなるのは、死んでしまうぐらいかなしいです。

どこかへ引っこししていった友だちも、かなしかったのかな。本当は行きたくなかったのかな。本当は家族でいっしょにくらしたかったのかなと考えると、とてもとても大人がわがままで子どものことなんか聞いてくれへんのやと思ってしまいます。もっと、子どもの気持ちをわかってほしいです。

引っこしした友だちがまださみしくてかなしい気持ちになっていないようにと思います。元気でいてほしいです。

弟の手帳

小学校六年　山村（やまむら）　琉偉（るい）

僕の弟は青いカバーのりょう育手帳を持っています。このりょう育手帳はみんながみんな持てる物ではありません。弟が初めてりょう育手帳のしんせいに行った日、母は泣きながら帰ってきたのを今でも覚えています。

当時の母は弟が「障がい児」になってしまったことが受け入れられてなかったんだと思います。病院の先生に「これから学校生活が始まるときに持っていたほうがいいです。」と言われ、市役所に行き手続きをしました。紙に記入しているときに弟の笑顔や産まれてきた日のことを思い出してずっと泣きながら記入したそうです。その時の職員さんがティッシュをもってきてくれて余計に泣いたそうです。

今では、りょう育手帳は大活躍しています。ユニバに行くと、体温調節が難しい弟のためにゲストパスを発行してくれます。ゲストパスは、並ぶのが難しい人のための物で並んでいるつもりで違うショーを見たりして時間になると案内してくれるありがたいパスです。ジャンカラも手帳を見せると割引になったり、美ら海水族館では無料で入ることができます。関空の駐車場も半額になったり、プールも無料になります。

手帳を出すのが嫌だった母も「これだけの人が色んな経験をさせてくれようとしてるねんね。色んな所に沢山連れて行って楽しい思い出を作ってくださいって言ってくれてるのかな？嬉しいね。」と言っています。

「みんながみんな賛成じゃなかったのかもしれん。特にジャンカラの人たちは会議をたくさんして決めてくださったのかもしれない。その気持ちが本当に嬉しいね。会ったことないけどジャンカラの社長さんにお礼言いたいね。」とニコニコして話しています。

話すことが苦手な弟もカラオケに行くと元気いっぱい歌っています。

初めは嫌だった手帳も弟の為に使うことはとても大事だと母は再確認したそうです。

何気ない弟の青い手帳ですが、僕たち家族にはとてもかけがいのない物です。

まだまだ手帳のことを知らない人やめずらしいのかマジマジ見る人もいます。この作文でりょう育手帳は、持っている人にとってすごく大切な物だと分かってほしいです。

適当に「ポイ」っと渡すのではなく顔写真や個人情報も書いている物なので何かのタイミングで手に取った人は、「大事な物」と言うことを忘れないでほしいです。

手帳を持ってる人は必要だから持っているのを忘れず、優しく接してくれると弟も僕たち家族もすごく嬉しいです。

弟が将来、社会に出たときに今以上に「障がい」について考えてくれる人が増えているといいなと思います。

僕は弟が笑ってる顔が大好きです。だから笑顔の花がたくさんさく世の中になることを信じています。

プラゴミの環境の中で自分にできること

小学校六年　甘崎倖羽

私は、毎日、朝テレビをつけてニュースを見ています。私がふと、ニュースを見ると、「海にプラスチックゴミが捨てられていて、海に住む生き物に悪えいきょうをあたえています。」とニュースキャスターが言っていました。（プラスチックゴミか…。）私はゴミで何か問題になっているんだと思い、そのままニュースを見続けました。すると、いきなりテレビ画面にカメが映り、なんだろうと思って私はカメをよく見てみました。少しカメを見た後、私は思わずはっとしました。カメの鼻にプラスチック製のストローがつまっていたからです。鼻につまったストローをぬこうと、人が必死にストローを引っ張っていました。（ひどい…。）私はそう思いました。しかも、テレビ画面には魚が映りだし、魚の体の中にプラスチックゴミの破片が入っているのを見ました。「プラスチックゴミは生き物にとって有害なもの」とテレビ画面に表示されていて、私はびっくりしました。（ふだん使っているプラスチックは、生き物たちにとってはとても危ないものなんだ…。）いつも使っているプラスチックが、ゴミとなって海に捨てられただけで、生き物はまちがって飲んでしまい、死んでしまう可能性があると思うと、私はとても悲しくなってきました。（生き物たちは何も悪くはないのに。）私は、こうなってしまう原因を考えました。（そういえば、最近ではポイ捨てが増えているニュースを見たことがある。）街中では、ゴミを勝手に道路や公園などに捨てる人が増えてきています。ポイ捨てもゴミが海や街中などに増える環境の原因ではないかと私は思いました。私が家族旅行で海へ行ったとき、砂浜がいろんな種類のゴミであれていたのを見たことがあります。私はそんな出来事からも、海に住む生き物にとって有害なプラスチックゴミを、少しでも減らして、環境が良くなってほしいと思っています。

そんなプラスチックゴミが増えている環境の中、ゴミを減らすために自分たちができることは、ゴミを見つけたらなるべく拾う、スーパーの袋はなるべく断りエコバッグを使う、プラスチック製のスプーンなどはあまり使わないことだと思います。自分たちができることは何か、考えて実行することで、少しずつ身の周りの環境が良くなると思います。だから、私は積極的にできることを実行し、ゴミを少しでも減らせたらいいなと思います。

これが私の人権メッセージ

中学校一年　永井陽夏乃

小学校五年生のとき、私はある体験をした。その体験は「男女差別」。そのころは五月に体育大会をひかえていて私たちはそれぞれの役割分担を決めていた。私は小学校一年生のときから兄の影響で応援団に入ることを希望していた。オーディションを受けて白組応援団の副団長をすることになったのだが、そこで男女に分かれて本番の衣装を配られることになった。男の子は、グループの色に分かれたハチマキと軍手。女の子はキラキラ光るポンポンだった。私は光るポンポンを受けとったけれどあまりしっくりこなくて担当だった先生に「ハチマキと軍手に変えてください。」と言った。

けれど先生は、「女の子はポンポンって決まっているからダメ。」と言って衣装を変えてくれなかった。私はそのことにとても腹がたった。カッコイイ応援団姿にあこがれていたのでよけい悲しくなった。担任の先生にそのことを話してから家に帰ると母のスマートフォンに担任の先生から電話がかかってきた。今でもその時先生が言ったことがカッコよくてしっかりと覚えている。「さきほど担当の先生方に交渉してみたのですが、ハチマキのことは昔から男女に分けると決まっているし、在庫もないので変えられないそうです…。でもやっぱりおかしいですよね。今どきこんなの男女差別だと思います。だから私、何とかしてみますね。」というものだった。

その後、先生が在庫を探して回り他の先生たちにも話し合いをおこしてくれた。結果私はあこがれの姿で本番にでることができた。これは全て、担任だった若い女の先生のおかげだ。

このことから私はあることを学んだ。それは、たとえ人権が侵害されたり、している人がいても、人権トラブルはたった一人の人間が変えようとすることで大きく動くということだ。つまり、一人ではなく今この世界に生きる人たちそれぞれが、人権について理解し意識すれば人権トラブルや差別はなくなると思う。たった小さな出来事だったけど、先生の行動によってとても大切で大きなことに気づけたし、つながった。

翌年、私は再び応援団に入った。そして今度は応援団長になった。女子初の団長である。私はハチマキをつけて本番に出た。女の子は何人もいた。

五年生でおきた一つの事件。私たちの身近にある人権トラブル。こうしてトラブルや差別がなくなっていくようこのさきも行動していくこと、これが私の人権メッセージ。

障害者と人権

中学校一年　梶山（かじやま）　怜央（れお）

僕にとって障害は身近です。何故なら僕は専門医が見ても微妙な軽いＡＤＤだからです。

ＡＤＤとは注意欠陥障害の略で、その名のとおり集中しないといけないことがあるときに、別のことに集中してしまったり、僕はないけど音に敏感だったりすることもあります。

友達も障害がある人が多いです。でも、いじめとか差別とかはあまり聞きません。

友達のうちの一人がこう言っていました。「気にしなくていいよ。」と。はじめは何のことか分かりませんでしたが、いろいろ考えてその意味が分かりました。僕はそのとき、その友達がもし、いじめられていたら…と考えるととても心配で、その友達の名前を聞くだけで反応するようになっていました。そんな僕のことを見て心配になったのか、「気にしなくていいよ。」と言ってくれたようです。

僕は何かトラブルに巻きこまれないことを意識しすぎて、友達の話をちゃんと聞いていませんでした。本当は、特別扱いもされないような、「障害者だから」というようなことを気にしなくてもいい友達になりたかったそうです。

僕が小学一年生のとき、こんなことがありました。一年生になって、発達障害のことを気にしはじめた僕は、泣きながら母にこう言いました。「発達障害になんかなりたくなかった。」と。宿題のプリントを一枚やるだけで一時間かかるし、学校では集団行動で毎回ミスをする。そのせいで誰かに迷惑をかけて嫌われる。そんなことが続いて、ストレスが爆発した。

そんな僕に、母はこう言いました。「障害はそんなに特別じゃないし、悪いことでも珍しいことでもない。個性なんだよ。」と。その日から、僕は障害のことを意識しないことにしました。友達もそんなに気にしていないし、そう考えるようになってからは前より楽で楽しかったのです。

僕は友達の言葉の本当の意味を知ったとき、あのときの母の一言で障害は個性だと思って意識しない方が楽なこともあるということを学んだのに、友達のことを特別扱いしてしまっていたと気付かされました。

障害がある人には、手助けが必要なときもあります。でも、僕やその友達の例から、時には「特別扱いして欲しくない。」という場合もあります。

「助けすぎず、助け合う」難しそうですが、楽しく普通にコミュニケーションをとってくれればいいんです。守られるだけが僕たちの幸せではありません。「障害者だから守る。」

「高齢者だから助ける。」のではなく、大事なのは障害の有無や年齢などいろいろなことにとらわれず、相手がどんな人でも、その人の言葉に耳をかたむけ、気持ちに寄り添うことであり、人権を尊重するということだと思います。

僕にできる手助けとは

中学校一年　猿田圭吾

僕は、不自由なく生活をしている。だから僕が普通だと思って当たり前にできていることが障害がある方やお年寄りには危険や大変なことがある。例えば、信号機がチカチカと赤になる前に点滅するのが早い信号をよく見かけます。このとき僕みたいに元気な人は走れるだろう。しかし、障害がある人で走れない人や車いすの人はどうなるのだろうと思った。たまたま僕と母が見かけたおばあさん、青で渡り始めてすぐ点滅になり、でも走れないおばあさんがいて、僕はあせって助けようとした。すると母が、

「転ばないように一緒に渡りましょう。」

と一緒に渡ってあげていました。ためらわずに手助けをできる人がたくさんいたら、安心して生活できる社会になると思った。他にもスーパーで買い物をしているとき、棚が高く商品がとれなくて困っている車いすの人がいた。また母が声をかけた。

「とりましょうか？」

たったこの一言で車いすのその人はほっとした笑顔だった。お母さんに「どうして分かったの？」と聞くと、

「キョロキョロしていたけど店員さんがいなかったから、店員さんじゃなくても近くにいる人が助けれるやん。」と言った。人の気持ちを思うこと、自分ができる身近な手助けが自分もうれしいものなんだと僕は教わりました。自分もそんな場面に出会ったらそっ先できる、ためらわない人になろうと思った。「人は順番に老いて年をとる。」これは福祉の仕事をしている母がよく口にする言葉です。クラクションを鳴らしてる兄ちゃんだって年をとる。昔の僕はあまりよく分からなかったけど、成長するにつれて分かってきた。助けるとか考えずに、誰かが困っているときはサポートする。たったこれだけで協力しあえる社会へ少しずつ実現できていくのだと、僕はとても思った。

僕には九十歳になるひいおばあちゃんがいる。今までは自分のことを全部できていた、しっかりとしていたひいおばあちゃんだが今年から要介護者となりました。色々なことで失敗してしまうが、祖母と母は怒りません。みんな順番に老いて年をとる。このことかと思った。僕が感じた出来事でした。ひいおばあちゃんは、失敗するのをこわがっているということ、失敗すると申し訳ないと思っていると聞かされた。どうしてあげるのが最善なのか考えてあげるのだという。あまやかすとトイレにも一人で行かなくなるので、あまやかしてはいけないということもある。失敗してもどうして失敗したのかや、不安にさせる言葉は絶対に使わないそうだ。「みんな順番」、この言葉に自分もひいおばあちゃんの手をひいてあげたり、少しでも僕にできる手助けを探したいと思った。

お年寄りでも障害のある人でも、人の手助けがあればいろいろな場所へ行けます。外に出ることでストレスもなくなり何かを楽しむことができる。心のバリア、これが一番つらいことだと僕は教わりました。差別や見て見ぬふりをされると心にバリアができてしまい、外へ出られなくなるそうです。段差をいくらなくしても、心にバリアをはってしまった人は外へ行きません。段差をバリアフリーにする社会も大切ですが、もっと当たり前にみんなが手助けを行動できる社会をどんどんつくっていき、心のバリアのないこの世の中にしていければ、もっとすばらしい世界になっていき、すばらしいと僕は思った。

見えない障害

中学校一年　細田彩花

私はスマートフォンを使っています。それを利用して毎日起こるニュースなどを読んでいると、色々なことを知ることができます。この前ヘルプマークのニュースを見ました。障害がある人や病気の人が説明しなくても見て分かるようにするマークがあることを知りました。他にも妊婦さんのマークがあるのは知っていましたが、ヘルプマークは知りませんでした。

私のいとこの四年生の男の子は自閉症です。でも見ただけでは分かりません。体が大きいのに泣いていたりすると、大人の人に「もう大きいのに何を泣いてるんや！」と言われたり、知らない子から「こいつ変や！」と言われたこともあるそうです。亡くなったおばあちゃんもがんだったのでしんどいときがありましたが、見ためでは分からないので、このヘルプマークがあれば良かったなと思いました。身体障害者のマークは、駐車場などでよく見ます。車イスに乗っている人は見たらすぐ分かるし、目が不自由な人も杖を持っているので分かります。でも見て分からない障害や病気の人も大変なんだなと思いました。

他にもトイレ優先カードがあったらいいと言っている人がいました。並んでいても大丈夫な人もいるけれど、病気の人で並んで待つのが難しい人がいます。自閉症のいとこも順番を待つのが苦手だけど、USJやディズニーランドではヘルプカードがあって、待たずに乗せてくれるそうです。

そういう優しい社会は、もし自分や家族に病気や障害があっても、とても安心できると思います。人権は、元気な人だけのためではないと思います。体や心が元気じゃない人にも人権があって優先されるべきものだと私は思います。

もしかしたら、クラスの中でも見ためは元気だけど悩んだりしている友達がいるかもしれません。

私はそういうことに気付ける人間になりたいと思います。社会には色々な人がいて、みんなが楽しく暮らせることが人権を守ることだと思います。

自分の目で確かめるということ

中学校一年　中尾佳音

私は、中国人の父と、日本人の母から生まれました。この中国人という言葉を聞いて、あなたは今、どう思いましたか？

「中国人は嫌い」、「マナーが悪い」、「反日感情が強い」、「空気が悪い」、「類似品ばかり作る」。どれをとっても、良い言葉ではありませんが、これは生まれも育ちも日本で、十三才の今の私が、メディアから得た情報だけで中国をイメージしたものです。そしてこれは、実際に中国へ行って、当たっていると思うものもあれば、一部外れだと感じているものもあります。なぜなら、それは中国人でも住んでいる環境や、ものの考え方、価値観が違うからです。同じ国なのに、いくつもの方言があり、そのほとんどが全く通じないくらい広大な国で、人口も日本の十倍です。

私は、中国人の父を恥ずかしいと思いません。なぜなら、国と人を一緒に考えていないからです。ただ現実は厳しく、周りの目はそうではないです。そしてそれは、中国でも同じで、もっとひどいのかもしれません。私は、父を一人の人間として、とても尊敬しています。父は努力家で、常にチャレンジ精神があり、失敗をおそれません。そして、失敗を人のせいにしたり、悪口も言いません。そんなけんきょな姿勢で取り組む姿は、とても格好良く見えて、尊敬できるのです。

ただ、そういう気持ちとは関係なく、学校の社会の授業では、歴史について学ぶ機会も増え、ある時、クラスの友人の一人が中国人をけなしていました。その子は、悪気があって言った言葉ではないと思いますが、なんだか父の悪口を言われているような気分になり、怒りとショックで何も言えず、傷ついたことがあります。

そしてそれは、日本人である母もまた同様の経験があるそうです。オーストラリアに留学していた頃、ある外国人に日本の歴史について触れられ、悲しい思いをしたそうです。そのとき初めて、日本の教育では教えてくれない歴史があると知ったそうです。そして、日本という国を客観的に見て、考えさせられたそうです。

井の中の蛙、大海を知らず。ネット社会の今、外に出なくても、沢山の情報を得ることができます。ですが、その情報が本当に正しい情報かどうか、それを判断することはとても難しいと思います。特にメディアは、一部分を切り取っただけの同じ内容を、何度も何度も繰り返し放送します。例えばそれが、一部の人の行動であっても、全員がやっているような勘違いするほど、刷り込まれることもあります。情報は情報として、知ることは必要です。ですが、その全てをうのみにして振り回されるのではなく、自分の目で見て学び、新たな知識を得る。そして、確かめる作業こそ今後求められることだと思います。

思いやりのある世界へ

中学校三年

私は「思いやり」が生きて行く中で、どれほど大事なものか中学生になった今、とても実感しました。その理由を説明します。

私の家は父、母、姉、弟、妹の六人家族です。その中でも、弟の話をしたいと思います。私の弟は小学校六年生の元気な男の子です。人とたくさん話すことが大好きで、サッカー観戦やゲームも、とても大好きです。家でも学校でも、みんなと変わらないように遊んだり、友達や先生と話をしたりしています。だけど弟には、一つだけ苦手なことがあります。それは「歩く」ということです。生まれつき足が不自由な弟は、歩くことができず、今までずっと車いすで生活してきました。家ではいつも楽しそうに学校の話をしてくれますが、私の心のどこかに、少し心配な気持ちがありました。

それは、私がまだ小学五年生のころのある休み時間、私が友達と外にあそびに行こうとしたとき、となりの校舎の窓から、一人で外を見ている弟を見つけました。私は友達に先に行ってくれるように伝えて、急いで二階に上がり、弟のもとへ行きました。弟の所に着き、私が来たことに気付いたとき、弟は私の方へ、急いで来てギュッと抱きしめ、その目はとても涙目でした。教室を見たら、だれ一人いませんでした。弟に聞くと、クラス遊びの日で、「みんな外に行った。」と悲しそうに言われました。私はとても心が痛くなりました。「下の階におろしてくれる先生もおらず、本当に一人で心細かった。」と言われました。もっと早くに気付いてあげていたら。私は何度も弟に謝まりました。そして、その休み時間は外には行かず、弟と二人でしゃべっていました。一緒にいるうちに弟もだんだん笑顔になり、ホッとしたような様子でした。

そして去年、私は職場体験で小学校へ行きました。五年生の時にこんなことがあったからこそ、行って弟を見ることは、とても心配でドキドキしていました。職場体験に行って、休み時間になった時、また丁度その日は、弟のクラス遊びの日でした。私は廊下から、弟のクラスをずっと見ていました。弟はまだ来ない、みんなが外に行くのに来ない、私はドキドキしすぎて倒れそうになっていました。すると最後の方に、弟の車いすをおしながら五人ほどで、教室から出てきました。弟と仲の良い男の子五人がみんなで楽しくしゃべりながら移動していました。階段を下りる時も二人が車いすを下の階に運び、二人は弟の手を持ちながらゆっくりと下りて行き、下についたときにまた車いすにのり、五人でとても元気にしゃべりながら、外へ行っていました。ドッチボールの時も交代で弟の車いすを押してあげたり、当たりそうになると、避けてあげたりしていました。それを見て私はとても安心しました。

前は一人でどうすることもできず、静かに黙って見ていたのが、今は自分の気持ちや今したいことなど、自分から友達に伝え、それを友達が共にやってくれる。人任せにせずちゃんと気持ちを伝える弟と、それをしっかりと理解し、一緒に行動をしてくれる弟の友達の「思いやり」にとても感動しました。そのような思いやりが、この世界にもっと増えていくと良いなと思います。

偏見

中学校三年　橋本（はしもと）　アシュリー　彩花（あやか）

今、世の中には様々な偏見があり、たくさんの人々の自由を奪ってしまっています。

私がまだアメリカに住んでいた頃、学校の友達に年の離れたトランスジェンダーの兄がいました。

お兄さんは、体は男性で心は女性です。友達がクラスのいじめっ子に不細工と言われたり、お兄さんは女性みたいだと言われ泣いて家に帰るときに私は、その友達が心配で一緒に帰りました。お兄さんは、友達の髪の毛を編み込みしてかわいい髪飾りをプレゼントして元気づけました。「あなたは不細工じゃない。心が綺麗で笑顔がとても美しいよ。人を見た目で判断して悪く言う人は心が貧しいね。とても残念ね。あなたはあなたのままでいいんだよ。」それが言える友達のお兄さんは、とても素晴らしい人だと思いました。

当時、私は「エレンの部屋」という番組を見ていました。番組の司会者は、エレン・デジェネレスさんです。彼女は、トランスジェンダーでありコメディアンとして活躍しアメリカを代表する司会者です。素晴らしいエンターテイナーであると同時に、シングルマザーや家族が兵役についている人をスタジオに呼びサプライズ訪問をしたりします。

貧しい地域の学校の校長が子どもたちの手助けを自分の給料を使ってしている情報を聴くと、その校長をスタジオに呼び彼女の努力を称え、学校の生徒全員に通学カバンや教材や文房具を支給したり、学校支援の為に大金を寄付したりしました。

さらに彼女はヴィーガンでもあり、生き物を大事にし、慈善活動に関する依頼には絶対「NO」と言わないことも知られています。温かい心を持つエレンを見れば、大切なのはその人の人間性であると分かります。

彼女は初めてテレビ番組でゲイであることをカミングアウトした人物であるということでも知られています。人目を気にしておびえているすべての同性愛者少年少女にとって彼女はヒーローであり、希望の光です。

エレンには番組終わりに必ず言う言葉があります。それは「Be　kind　to one　another」、意味は「みんな、お互いに親切にしましょう。」一人ひとりがこの気持ちを持って日々を過ごしたら、きっと人間に優しい社会になると思います。

二〇一六年に国を正しい方向に導いた人物として、オバマ大統領から民間人で最も名誉ある自由勲章を授与されています。彼は、二十年前にエレンが同性愛者だということを国民に告白するのがどれだけ勇気のいることでどれだけアメリカにとって重要だったかを賞賛し、人々に彼女の偉大さを伝えました。

自分が自分である以上に良いことはなく、誰かのふりをする必要はない。私はエレンの活動から学びました。そして少しでも彼女のような行動がとれる人間になりたいです。

居場所

中学校三年　小寺澤（こてらさわ）　結（ゆ）　花（か）

「青いブレスレット運動」という運動を知っていますか。この運動は、自傷行為をしていた人や、大切な人が自傷行為をしているという人が左手に青いブレスレットをつけて自傷行為をしている人に向けて「ひとりじゃないよ」と伝えるものです。ブレスレットに限らず、青系の色ならミサンガやヘアゴムでもいいそうです。今、私の左手首には青いミサンガがあります。

「リストカットは気持ち悪い。」「かまってほしいだけ。」「本当は死にたくないくせに。」「死ぬ勇気なんてないくせに。」「心配されたいだけ。」ＳＮＳを開けば、そんな心ない言葉を見かけます。たしかに血が流れるのを見ていい気持ちはしないかもしれません。ほんの少し手首を切ったくらいでは死ねないかもしれません。だけどそれをリストカットしている人に対して言うのは、その人を追いつめるだけだと思います。私は、リストカットをするのは、本当は生きていたいからだと思います。誰にも吐き出せなかった気持ちやストレスや明日がくることへの不安を、血を流すことで吐き出しているんだと思うからです。リストカットをする理由はいじめ、虐待、ストレスなど人それぞれです。よく「親からもらった体を大切にしなさい。」と言う人がいますが、それはたぶん綺麗事です。もし、親に嫌われていると感じていてリストカットをしているなら、その言葉は心に響きません。私のＳＮＳの友達は、自傷行為をくり返していました。私はその人に「自分を大切にした方がいいよ。」と言いました。その人から返ってきたのは、「どうせ私なんて誰にも必要とされないし、そんな言葉はただの綺麗事だよ。」という言葉でした。私はその言葉を聞いた後で気づきました。たくさんの綺麗事を並べるんじゃなくてたった一言、そばにいると伝えた方が心に響くということに。綺麗事を並べるのは簡単です。でも、必要としているのは綺麗事ではなくて、一人でもいいからそばにいてくれる人なんだと思いました。

今の日本は、平和です。戦争もなく、生活に必要なものはだいたいそろっています。では、なぜ自ら命を絶つ人がいるのでしょうか。私は、そういう意味では今の日本はまだ平和とは言えないと思います。なぜなら、自ら命を絶つ人がいるからです。死を選ぶこと、それは勇気が必要なことです。なのに自分から死を選ぶのは、生きるより死ぬ方が楽と思うくらい辛いからではないですか。毎年、二学期の始業式とその前後は学生の自殺が最も多いそうです。いじめや仲間はずれなど、遊び感覚で、本当に軽い気持ちで始めたことが相手を自殺まで追いつめてしまうこともあります。私は今まで学生が自殺したというニュースが流れるたびに「なんで周りが止められへんかったん？」と思っていました。

だけど今は、周りは冗談のつもりでやってるから、やられている側が辛いということも、死を考えるくらい追いつめられていることも気づいてないんだろうなと思います。親には心配をかけたくないから話せなくて、先生に言ったらまたいじめがひどくなるから、誰にも話せなくて死ぬことでしか自分の思いを伝えられなかった。そこまで追いつめてしまったのは、いじめている人だけではなく、ただ見てるだけだった“傍観者”のせいでもあると思います。自分がいじめられたくない、ただそれだけで見殺しにされた。そのことはきっと自殺した人にとって許せないことでしょう。私にはいじめられた経験も当然自殺した経験もありません。でも私がいじめられて死を選ぶとしたら、一番許せないのは傍観者です。今もこれからもそれだけは変わらないと思います。

最後に、私が辛い時いつもそばにいてくれた友達のように、私も誰かの支えになりたいです。もう誰にも居場所がないとは言わせない。これが今の、私の目標です。

遊園地で思いっきり楽しみたい

支援学校高等部三年　西崎（にしざき）　希美（のぞみ）

私の両親も私も耳が聞こえません。私の弟妹も何人か聞こえません。そんな私たち家族には共通点があります。それは遊園地のアトラクションがとても大好きなことです。スリル満点で非日常を味わうことができるので、日ごろのストレス発散になります。

しかし、アトラクションの説明を受けるとき、いつも聴覚障がいがあるからという理由で

「同行者はいますか？」

と健聴者が一緒にいるかどうかを聞かれます。そのたび

「いません。」

と答えますが、

「何かございましたら、私どもでは対応しかねますので…。」

と、やんわりと乗車拒否されることが多いです。けれども、父は身振りやスマホでメモを提示して、

「それは差別だ。」

とはっきり抗議をしてくれますので、最終的には自己責任という形で乗れることが多いです。私はせっかく家族で楽しむために来たのに、スタッフとはいえ知らない人から遠回しではあるけれど、「聞こえないからだめです。」と割り込まれたら、気を遣いますし、思いっきり楽しめないので、楽しい気分とがっかり感が入り混じったまま、遊園地を回ることになります。

しかし、よく考えてみるとそれも当然かなと思います。事故や地震など何かあった場合、スタッフとしては私たち聞こえない人たちへの伝え方やどう助けたらいいのかなど、考えるのに時間をかけてしまうでしょう。

そういう理由であれば、同行者が必要だという説明を入場受付やインターネットであらかじめ示してほしいです。私たちもそのことぐらいは理解しているつもりなので、傷つかないようにと配慮しているのかもしれないですが、乗りたいアトラクションの目の前で、健聴者という同行者がいないからという理由だけで断られるのはとても悲しいです。

それでしたら、緊急事態に備えて、避難経路をはっきり表示したり、前もってゴールを明確にボードで指示をしたりして、聴覚障がい者でも健聴者でも目で見て安心してアトラクションを楽しめるような工夫をすれば、このようなことはなくなるのではないでしょうか。

泣き笑い人生　―私の夫と識字―

成人　鬼塚（おにづか）　美佐子（みさこ）

私が三年ほど働いたうどん屋を辞めて家に帰った頃、私に結婚の話がありました。父がすでに決めていたようです。私は、結婚相手だけは自分で決めたいと思っていましたので、父には返事をしないでおきました。

その後、長崎県の金井崎炭鉱で今の夫と出会い、私は十八歳で結婚しました。夫は二十三歳でした。両親の反対はありましたが、それを押し切って結婚しました。結婚式に両親は出席してくれませんでした。

私は、小学校には三年生までしか行っていません。家が貧乏で女性に学問は必要ないと言われていたからです。

私は、人権ふれあいセンターの識字学級「つどい」で学習をするように夫に勧められたけど、夜間学校を卒業したら「つどい」に行こうと思っていました。

夜間学校では、中学校の教科書を使って学習するので、小学校の漢字の読み書きがなかなかできません。「つどい」では、その点小学校の漢字の読み書きができるので、夫はその方がよいと勧めていました。それで、先輩のお世話で入れてもらいました。

「つどい」では、週二回勉強しています。時には挫折しかかることもあります。しかし、気分をとりなおして勉強するようにがんばっています。勉強ができることは、私にとって、とてもしあわせであるとおもっています。

家でも夫といっしょに学習することがあります。そんなときに、夫は私に「漢字を覚えてもすぐわすれるなあ。」と言いながら、電子辞書を使って親切に教えてくれます。私は、そんな夫にいつも感謝していました。

二〇一七年三月、春の彼岸の日に、夫は私を残してひとり旅立っていきました。私が長い間勉強を続けてこられたのは、夫の励ましがあったからです。

夫を亡くして、すぐ新年度の一学期が始まりました。しかし、私は「つどい」を休みました。「つどい」を休んだのは、私の体や頭のバランスがとれず、ふらふらしていたからです。これでは、無理でした。それに、夫の死亡の手続きをするために毎日出かけることが多く、それで疲れ切っていました。

一学期はすぐにおわりました。二学期を迎えるに当たって、少しでも家から出ることを考えました。「よし、『つどい』へ行こう。」と決心しました。この決心は、自分で決めたものです。

私の夫は、生前「つどい」に休まずに行くようにしつこく言っていました。「漢字を覚えられなくても、『つどい』に行って、みんなと勉強すれば一つでも二つでも覚えられるから、

必ず行きなさい」と。

また新学期をむかえて、作文が書けるまでに回復しました。「つどい」に来ているときは、ふだんの悩み事を忘れて、識字に集中できます。みなさんから元気ももらいます。気分も晴れて、すっきりして家に帰れます。

「つどい」は、私にとって楽しみと生きがいとなっています。

緑色の消防車

成人　橋本（はしもと）　龍（りょう）

「消防車を緑色に塗るなんて、おかしいよ。」消防車を描く写生大会で放った、小学生の頃の私の言葉だ。今考えると思慮の欠けた言葉だった。言われた彼は驚いたように黙り込んでしまった。周囲の友人たちの多くも、彼の緑色の消防車を見て驚いていたし、大多数は赤いクレヨンを使っていた。自分の発言にはなんのためらいもなく、ただ正しいことを言っているつもりで、悪気はなかった。まして、彼を傷つけていたことにはまるで気づかなかったのである。

それから時間が経ち、私は美術大学でデザインを学ぶ。その過程では色や、それを見る人間の視覚、ユニバーサルデザインの講義を受けた。ただ、私の内心では「色は格好よければいい」などと考え、あまり興味を持てないでいた。が、そこで出てきた「色覚異常」の解説に、私は「はっ」となった。日本では男性二〇人に一人の割合で存在し、決して珍しくない症例。人によって様々だが、大多数の人とは色の見え方が異なるらしい。

その話を聞いて、私は幼少期の「彼」を思い返した。まさに彼は色覚異常で、その中でも赤色と緑色の区別がつきにくいタイプの色覚を有していたのだ。目の前の消防車と同じ色のクレヨンを選んだつもりが、我々大多数の目には緑色に見えるのだ。

私は知った。あのとき図らずも心無いことを言ってしまっていたということ。自分や周囲の大多数が正しいと考え、少数派の彼らへの配慮や共感性に欠けた発言をしていたこと。

ただ、そのとき私は幸いにも、彼らに対して自分が役立てることを知った。それはユニバーサルカラーに関する知識を習得してデザインができれば、色覚上少数派の彼らであっても、わかりやすいデザインができるということだ。色使いを工夫すれば、彼らにも文字や図形が認知しやすくなるのだ。色は実は奥が深く、そして重要で、彼らへの大きな可能性を持っていると知り、耳を傾けて夢中で講義を聞いた。

大学を卒業して、私は念願のデザイナーになり、現在では大型の作業機械の液晶メーターのデザインを担当している。メーターは機械の状態をユーザーに判りやすく伝えるためのもので、安全で確実な作業に関わる、非常に重要なコミュニケーションツールだ。そのデザインをする上で、私は常に意識していることがある。それは色覚異常の人たちにも、必ず見やすいデザインを考案することだ。自分たちのような大多数が見やすければよいのではなく、彼らの特性を考慮し、私たちと何ら変わりなく、安全に機械を使ってもらえるデザインにする。それが、私の誓いである。これは、幼少期にはできなかった、「彼」らを尊重する気持ちであり、共に生活をしやすくするための、自分に課せられた使命だと考えている。

「いろとりどりの世界」を見て

成人　伊藤彗太

研修で「いろとりどりの親子」という洋画を見た。自閉症スペクトラム障害やダウン症といった子どもたちと、その親の家族の絆についてのドキュメンタリー映画だった。様々な課題がある子どもたちに対して、苦悩しながらも懸命に向き合う家族の姿がありと描かれていた。

その中で、私が印象に残ったのは、この映画が「犯罪加害者の家族」の姿を、克明に映し出していたことであった。凶悪犯罪を起こしてしまった息子に会えなくなった両親と、その家族の暮らし。その一幕を見たとき私は、「日本の人権感覚では、まだこの作品を作ることはできない。」と強く感じた。欧米では、「犯罪加害者の家族も、同じように事件の被害者である。」という考え方が浸透していると聞いたことがあるが、このシーンではまさにその人権意識が発揮されていた。

日本での犯罪加害者の家族に対しての扱いは、欧米のそれとは違う。凶悪な犯罪が起きたときは決まって、毎日のようにニュースが加害者の身の回りのことを取り上げ、その家族の個人情報についても煽情的に報道していく。まるで家族も共犯者かのように扱っているのだ。当たり前かのように行われるその行為に、明らかな人権侵害をしているという意識は感じられない。

日本人の人権感覚では、あの映画のような「加害者の家族」について描くことはまだ難しい。そう思ったとき、私自身の人権感覚もまた、まだまだ後進的ではないかと疑念を持った。これからの報道の在り方についてを考えるとともに、それを受け取る私たち一人ひとりの人権感覚も、絶えず磨いていかなければならないと強く感じさせてくれた体験だった。

今が青春

成人（中学校夜間学級三年）　森本文子

私は、一九四一年大阪市住吉区粉浜で生まれました。四歳の時に、大阪の空襲にあいました。お母さんに手をひかれて逃げたのをかすかに覚えています。空襲で家を焼かれ、堺市に来ました。空襲のことは詳しく思い出すことはできません。ですが、戦争が終わった後も長い間、飛行機の音が怖くてなりませんでした。また、戦争が始まるのではないかと心配になりました。

戦争が終わって、何年かして、母が病気で亡くなりました。私が九歳の時でした。それから、家の用事と妹の世話を私がするようになりました。父は仕事で、家にいないことが多かったのです。その頃の家事は、何もかも手仕事でした。ご飯を炊くにも、火起こしからでした。もちろん洗濯も手でします。家の外に近所のお家と共同の水道がありましたが、冬の寒い時には辛い仕事でした。

小学校を卒業すると近くの織物会社に働きに出ました。仕事は何とか人なみにしましたが、職場の友だちや近所の人たちが中学校の話をしているのを聞くのが嫌でした。みんなとても楽しそうに、学校のことを思い出して話をするのです。私はその場にいるのが、とても辛かったです。大人になって、「なんで自分だけ中学校に行けなかったのか？」と何度も考えました。そして、もう一度学校で勉強したいと、心の中でいつも思っていました。でも、それを口にすることはできないまま、時が過ぎていきました。ある時、近くの小学校で夜間中学のポスターを見つけました。それまで、夜間の中学校があるということは知りませんでした。あぁ、こんないいものがあるんだと思いましたが、なかなか夫に言うことはできませんでした。夫にはいつも、「夜に一人で外に出たらあかん。」と言っていたからです。その上、その頃夫は病気がちで寝ていることもありました。

九年前に夫が亡くなり、それからしばらくして夜間中学に入学することにしました。その時すでに私は七十歳になっていました。勉強がむずかしかったらどうしよう、私でも勉強できるのかなと思いながら始まった学校生活ですが、どの教科も、やさしくていねいに教えてくれます。

勉強で特に面白いのは国語と社会です。私はもともと本が好きで、よく伝記や自叙伝などを読んでいました。でも、時々漢字が分からないこともあり、とばして読んだり辞書で調べたりして大変でした。学校に入って難しい漢字もたくさん覚えました。社会科では堺の歴史のことなども分かるようになり、行基という偉いお坊さまがいたことも知りました。

勉強ができる今が幸せです。自分に自信を持てるようになり、気持ちも明るくなりまし

た。生徒会役員として、大勢の人の前で話もできるようになってきました。これからも一生懸命勉強して、前向きの人生を送りたいと思います。私にとっては「今が青春」です。

選考にあたって

このたび「第四十回わたしからの人権メッセージ」に応募していただいたみなさん、どうもありがとうございました。また、特選を受賞された二十名のみなさん、入選を受賞された三十名のみなさん、おめでとうございます。

今年度は、三千二百三十一点にも及ぶ多くの作品が寄せられました。このうち小学生が九百九十五点、中学生が一千五百六十三点、高校生が五百五十八点、成人が百十五点でした。この取組の広がりと深まりを審査員一同、うれしく思います。

選考では、一次審査で三千二百点を超える作品を五十点に絞り込み、さらにその中から二十点の特選作品を選出いたしました。審査にあたっては、さまざまな体験や知り得たことを自分自身の問題として捉えられているか、差別をなくすためにどのように行動しようとしているか、またその作品が広く市民の人権意識向上につながるものであるかを、大切なポイントといたしました。

今年度は、応募作品数が増え、さまざまな年齢層の方からのすぐれた作品が集まりました。中でも高校生からの応募が増加したことが今回の特徴です。テーマ別では子どもや障がい者をテーマとする作品が多く寄せられましたが、高齢者ドライバーによる交通事故や京都での放火事件などの大きなニュース等から気付いた人権の大切さや人権課題、日頃、楽しんでいるスポーツから人種問題や平和について考えたもの、普段、利用している携帯電話やインターネットの危険性について考えたものなどさまざまなテーマの作品が寄せられました。

どの作品からも、お互いを思いやる気持ちや人権に対する募る思いが感じられ、自分にできることを一生懸命考える真摯な姿勢に強く心を打たれるものがありました。また「誰ひとり取り残さない」という理念をもって国際社会全体で取り組む「ＳＤＧｓ（エスディージーズ）（持続可能な開発目標）」の達成にふさわしい作品が多くありました。

しかし、メッセージとして届いていない人権課題や声なきＳＯＳもあると思います。そのことを忘れずに、私たちは今後も人権を守るための積極的な活動に取り組んでいきます。

思いのこもった素晴らしい作品との出会いを、ありがとうございました。

「わたしからの人権メッセージ」を契機として、すべての人が人権問題を自分自身のこととして捉えて行動し、堺から人権文化の花が咲き、人権尊重の輪が家庭、学校、職場そして地域社会へと広がっていくことを願っております。

審査員長　山口　典子
（堺市人権教育推進協議会　副会長）

御応募いただいた学校その他団体名

赤坂台小学校
☆榎小学校
☆神石小学校
☆泉北高倉小学校
☆土師小学校
原山ひかり小学校
深井小学校
☆美木多小学校
☆陵西中学校
☆赤坂台中学校
鳳中学校
☆津久野中学校
浜寺南中学校
☆美木多中学校
大阪商業大学堺高等学校
インターユース堺（IYS）
浅香山小学校
家原寺小学校
☆北八下小学校
大仙小学校
八田荘小学校
はるみ小学校
深阪小学校
美原北小学校
☆浅香山中学校
大浜中学校
殿馬場中学校
原山台中学校
☆南八下中学校
若松台中学校
賢明学院高等学校
☆(株)クボタ堺製造所
市小学校
☆鳳小学校
さつき野小学校
☆八田荘西小学校
☆東浅香山小学校
福泉小学校
向丘小学校
☆旭中学校
☆金岡北中学校
☆殿馬場中学校夜間学級
東百舌鳥中学校
美原中学校
堺高等学校
堺・教師ゆめ塾
上野芝小学校
鳳南小学校
三宝小学校
錦小学校
浜寺小学校
東陶器小学校
福泉中央小学校
八下西小学校
☆泉ヶ丘東中学校
☆金岡南中学校
長尾中学校
☆深井中学校
三原台中学校
泉北高等学校
☆堺識字・多文化共生学級「つどい」
英彰小学校
金岡小学校
城山台小学校
西百舌鳥小学校
☆浜寺東小学校
平尾小学校
槇塚台小学校
熊野小学校
☆大泉中学校
五箇荘中学校
八田荘中学校
☆深井中央中学校
美原西中学校
だいせん聴覚高等支援学校
☆堺自由の泉大学

（五十音順）

※五年以上連続で応募があった学校や団体には、☆印をつけています。

御協力ありがとうございました。

応募作品テーマ内訳表【応募数】

（単位：点）

テーマ ＼ 学年	小学校 1・2・3年生	小学校 4・5・6年生	中学校	高等学校/大学	一般	分野別合計
同和問題	0	83	15	6	6	110
女性の人権	0	23	39	15	7	84
障がい者の人権	4	58	315	50	25	452
外国人の人権	2	8	108	31	6	155
子どもの人権	106	144	302	23	15	590
高齢者の人権	0	1	47	10	8	66
LGBTなど性的マイノリティの人権	0	19	77	32	12	140
平和問題	39	130	111	43	5	328
環境問題	0	17	126	73	2	218
HIV感染者・ハンセン病回復患者の人権	0	0	14	2	1	17
犯罪被害者やその家族の人権	0	1	24	10	2	37
インターネットと人権	0	7	95	34	8	144
SDGs(持続可能な開発目標)	0	4	7	7	2	20
堺セーフシティ・プログラム	0	1	1	3	0	5
憲法と人権	0	3	12	9	0	24
その他さまざまな人権	95	250	270	210	16	841
学年別応募数	246	749	1563	558	115	3231
年代別応募数	995		1563	558	115	3231

【今年度応募作品の傾向について】

○子どもの人権、障がい者の人権及び平和問題をテーマとした作品が特に多かった。平和問題をテーマとした作品では、学校全体で行われる平和学習等から考えた作文が多く、学校教育での熱心な取組が分かった。

○子どもの人権をテーマとした作品では、家族とのつながりを再確認する内容や、どのような大人になりたいかを考えた作文が多くみられた。

○インターネットと人権をテーマとした作品では、普段、利用している中高生からの作品が多く、インターネット上の人権侵害やいじめ等が大きな問題として認識されていることがうかがえた。

○今年を反映した作品として、両親による幼児虐待やいじめを苦にした自殺、高齢者ドライバー等の報道や、来年開催されるオリンピックやパラリンピックを控えスポーツを通して人権について考えた作品も多かった。

○ハンセン病回復患者の人権をテーマとした作品は、応募数が増え、関心の高まりを感じられた。

○さまざまな人権をテーマとした作品では、同一のテーマでもいろいろな角度から考えられた作品が多かった。

第40回 わたしからの人権メッセージ
作　品　集

2019年12月発行

編集・発行　堺市人権教育推進協議会
〒590-0078 堺市堺区南瓦町3番1号
堺市人権推進課内
電話 072-228-7420
FAX 072-228-8070

審査員

井上知子（堺市人権教育推進協議会常任幹事）
江川玲子（堺市教育委員会生徒指導課指導主事）
奥井光治（堺公共職業安定所管理部長）
小倉美津子（堺市人権教育推進協議会会計）
越智　主（堺労働基準監督署副署長）
小林拓之（大阪法務局堺支局総務課長）
瀧口住子（堺市男女共同参画センター館長）
松尾恵子（堺市総務局人事部人材開発課長）
山口貴詩（堺市人権教育研究会事務局次長）
山口典子（堺市人権教育推進協議会副会長）

＜敬称略・五十音順＞

私たちのまち堺から
人権文化の花を咲かせよう

この作品集は、「第 40 回わたしからの人権メッセージ」に
応募された 3,231 点の作品のうち、特選作品 20 点を掲載したものです。